

# ホスピタリティーある地域づくり

## 小野川温泉観光知実行委員会

小野川温泉河鹿荘

佐藤 雄二



小野川温泉観光知実行委員会。どこにでもありそうな名前の委員会だと思われるだろう。しかし、観光地の「地」が「知」となっていることは、活字で表さなければお分かりにはならなかったはず。

この「地」が「知」になった意味とは！  
自分たちの住んでいる地域・町を自分たちで考え取り組んでいく。単にお金を掛けてハード造りしてきた時代は終わった。これからはお金が無くてもお金を掛けなくても、出来る所から、いろんな人たちが集い語り、知恵を出し合い工夫しよう！その知恵の「知」！そして、自分たちの住んでいる地域・町の良い点・悪い点、また足りない点・ほしい所など、足元を再度見つめ直して地域・町をくわしく知ろう！の「知」が委員会の名称になっているのである。

平成十三年四月設立となったこの委員会は、初年度予算額はゼロ円から始まった。但し、さまざまな取り組み・アイデアを行っていくには、ある程度お金は必要である。その

資金を、温泉街の旅館や商店を対象とした各組合の会費を多くすることや、負担金として徴収することをやめ、委員会では何か基金づくりになる方法を考えていこうとなり、小野川温泉お楽しみプラン（別名アクシジョンプラン）の一つ、夢ぐり（ゆめぐり）プランで収益を



夢ぐり手形独楽

生み出すこととなった。

お客様から千円で三カ所の入浴ができる「夢ぐり手形独楽」を買っていただき、その売り上げを委員会に入れる。販売先は旅館で、販売手数料は無し。そして、各旅館の入浴代を一枚のシールに付き二百円と決め、手形独楽の仕入代も一個二百円とした。そうすると、一個の夢ぐり手形独楽に入浴代が三分で六百元と手形独楽代二百円。総仕入額が八百円となり、二百円の収益が生まれる。この利益をアクシジョンプランに当てていくことになった。当初、年間販売目標数を千個としたが、旅行企画商品の順調な販売やマスコミにも取上げられ、この夢ぐり手形が年間約三千個販売できたのである。また、お客様は必ずしも夢ぐりを三カ所巡ることは無く、実際使用率は約七五％。一個の夢ぐり手形を販売すると約三百五十円の基金が出来た。結果的に一年後には約百万円の資金が出来上がったのである。

それでは、このお金をどうする、何に使っ



露天風呂 小野の湯

ていこうか！委員会での議論がはじまった。平成八年からほたる祭りの時期、お祭り期間限定の露天風呂を、観光知実行委員会の前身である、ほたる祭り実行委員会で作ってきた。しかし、期間も限られ仮設の露天風呂であったため、委員会メンバーの思いは、一年中お風呂に入れて、なおかつ小野川温泉の目玉的な存在の露天風呂を作りたいと感じていた。それではこのような露天風呂を作ってみよう！次年度の予算からの基金も加えて、約百八十万円で念願の露天風呂建設が始まり、平

成十四年五月に完成したのである。

ゼロから始まった取り組みが、思った以上の結果を出し始め、自分たちの思い描いている夢や理想が現実に変わる。このことの驚きと喜びを肌身で感じ取ったのである。

昨年出来上がった露天風呂は、当初から無料にてご利用いただいている。もともとはお客様から頂いた夢ぐり手形の代金を運用して作ったからだ。無料にすることで小野川温泉に來られたお客様は誰でも利用できるが、その他に小野川温泉や周辺の住民の方も無料で利用できる。今まで小野川温泉になかった露天風呂や足湯・飲泉所が新たに出来上がり、お客様や地域の住民分け隔てなく無料で利用できる。委員会が考えている地域・町づくりを進めていくには商売上の利益を先に上げていては、いつまでたつてもできない。なぜなら町には、商売をしている人と一般住民がいるからだ。温泉街、いわゆる観光の色が濃い小野川の場合、この一般住民の方々のいかにして町づくりに関心を持たせ共に考え、行っていけるかで、スピードも内容も違ってくるからである。そのためには先ず観光サイドがまとまりアクションを起こす。そして住民の方々にこの町に住んでいて良かったと思えることを築き上げ、観光面での関心と理解をいただく。ギブアンドテイクが必要だと思つた。「お願いします」だけでは住民の方々の心はなかなか動かない。ホスピタリティー（おもてなしの心・親切心）、これはお金をもらう商売の方々にあつて当然のこと。しかし、町全体でホスピタリティーを出していくには一般住民の皆さんの参加がなくてはならない。今年八月には、小野川温泉に住んでいる皆

さんを対象にした「小野川町づくり委員会」が発足した。この委員会には、町内会・小町会（老人会）・河川愛護会・堰組合・消防団や観光協議会など、町全体の各組長がすべて入っている。そしてオプザーバーとして、市、県の行政機関も入っている。先ずはいろんな方々が一同に集まり話し合いをする。議論は徹底的に行い、お互いに理解し合うことから始めている。

短期的な取り組み、また長期的に考え取り組む事柄。一度にたくさん取り組みはできない。「夢・なりたい」と思うことについては、ある程度順序を踏まえた計画が必要になる。まさに町づくり委員会の取り組みは、今後十年後、三十年後の小野川温泉の行く末を左右する上でとても重要なことである。

将来、世代を超えながらも、脈々と思想が受け継がれ、住んでいて良かった、訪れて良かったと思える小野川になりたいと願つてやまないのである。

## 佐藤 雄二（さとう・ゆうじ）

小野川温泉河鹿荘代表取締役社長。  
1963年山形県米沢市生まれ。1981年山形県立米沢工業高等学校卒業。1983年日本ビジネススクール（観光科）卒業。同年9月、日本ヒルトンインターナショナル（現東京ヒルトンホテル）入社。1986年日本ヒルトンインターナショナル退社。1987年（有）河鹿荘入社。1993年常務取締役、1998年専務取締役を経て、2001年代表取締役社長に就任、現在に至る。  
2003年国土交通省より、「観光カリスマ」に選定。現在、米沢観光協会青年部会長、JTB上杉会誘客部会長、小野川温泉観光知実行委員長を兼任。